

# 教員養成課程におけるキャリア教育シンポジウム

## —視野の広い教員養成に向けた実践報告—

久保田愛子・久保 元芳・熊谷 朋子・石塚 諭・南 伸昌

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第8号 別刷

2021年8月31日



# 教員養成課程におけるキャリア教育シンポジウム<sup>†</sup>

## —視野の広い教員養成に向けた実践報告—

久保田愛子\*・久保 元芳\*・熊谷 朋子\*\*・石塚 諭\*・南 伸昌\*

宇都宮大学共同教育学部\*

宇都宮大学就職・キャリア支援センター\*\*

本稿では、教員としての就職を希望する学生の他、教員として就職するか迷っている学生や教員以外の道を選ぶ学生も含め、キャリア選択上の自己効力感を高められるよう実施したキャリア教育シンポジウムの報告を行う。教員、民間企業、公務員の外部講師を招いたキャリア教育シンポジウムをオンライン上で行った結果、参加者の高い満足度が得られた。また、シンポジウム前後において、キャリア選択自己効力感のうち、目標選択・計画立案・情報収集に有意な伸びが見られ、特に目標選択と計画立案の効果が大きかった。

キーワード：キャリア教育、教員養成課程、シンポジウム、自己効力感

### 1. はじめに

本学の教員養成課程においては、教員になる学生の教育を主たる目的としているが、キャリア発達上、必ずしも自信をもって教員になることを選択できている学生ばかりではない。教員養成課程における1・2年生を対象とした調査からは、学生のキャリア選択自己効力感には濃淡があり、教員志望度が高いほどキャリア選択自己効力感が高いことが示されている(久保田・石塚・久保・熊谷・南, 2020) [1]。また、本学においては教員にならない学生も一定数見られ、過去10年間で(2010-2019年度)教員にならない学生は平均37.4%(大学院進学者と保育士を除いた場合は平均28.8%)で推移している。教員にならない理由としては、他の職業のやりがいを見出すなど前向きなものがある一方で、教員の大変さなどによる後ろ向きなものもみられ(南・久保・熊谷, 2020) [2]、教員以外の就職を希望する学生のキャリ

ア発達を支援するプログラムも必要と考えられる。

そこで、本研究では教員養成課程においても教員就職を前提視せずに、将来、教員として就職するか迷っている学生や教員以外の就職を希望している学生も視野にいたキャリア教育シンポジウムを模索し、実践を行った。本稿では、その実践内容と、その効果検証の結果の報告を行う。

### 2. シンポジウムのねらいと事前準備

#### (1) シンポジウムのねらい・計画

①ねらい 本シンポジウムにおいては、以下を主たるねらいとして実践を計画した。

- ・教育学部において教員就職を希望している学生、教員以外の就職を希望している学生、進路を迷っている学生を対象にした外部講師参加の教育プログラムの実践を通じて、教育学部での4年間の学びが将来のキャリア形成にどのように生かされるのかを理解する。
- ・学生が自己の目指す将来像をイメージしながら、今後、教育学部でどのような学びをしていくべきなのかを深く考える機会とする。

②実施方法 コロナ禍であったため、シンポジウム形式の教育プログラムをZoomにより実施することとした。実施時間は100分とした。

また、対象者は、教育学部において就職活動が本格化する前段階にある教育学部2年生を主たる対象とした。ただし、それ以外の学年の参加も可とした。

<sup>†</sup> Aiko KUBOTA\*, Motoyoshi KUBO\*, Tomoko KUMAGAI\*\*, Satoshi ISHIZUKA and Nobumasa MINAMI\*: Symposium on career education in teacher training course: Practice report for broad-minded teacher training  
Keywords: Career education, Teacher training course, symposium, self-efficacy

\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

\*\* Employment and Career Support Center, Utsunomiya University  
(連絡先: a-kubota@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

なお、参加条件として教員志望の有無は問わなかった。

③外部講師の特徴 本シンポジウムでは、民間企業や公務員など教員以外の就職を検討している学生にも資する内容となることを目指したため、外部講師としては、地域を基盤として活躍されている外部講師を設定し、①現職の学校教員の他、②民間企業、③公務員の方も招いた。ただし、教育学部の学びや教員という職業との関連が講演内容に入ることが見込めるよう、民間企業や公務員の方も、教員養成課程の学部出身者、あるいは教員歴のある方に依頼することにした。

## (2) 外部講師との連携

本学の実情にあった講演を行うため、外部講師には、事前に、シンポジウムの趣旨を説明するとともに、本学で事前に行っていた就職に関する学生の不安の自由記述をまとめた調査資料を送付し、学生の実態を共通認識するようにした。このことにより、外部講師の講演が実態を踏まえた内容になるよう配慮を行った。

## 3. シンポジウム当日の様子

### (1) シンポジウムに参加登録した学生の特徴

シンポジウムには、17名（男性3名、女性14名）の学生が参加登録を行った。その内訳は、1年生4名、2年生7名、3年生5名、4年生1名であった。就職先としては、公務員に内定をもらっている学生が1名で、その他の学生の教員志望度（「現時点で教員になりですか」という質問に対する回答）は図1の通りであった。「とてもそう思う」と答えた学生は一人もいなかったが、「ややそう思う」と答えた学生は7名（41%）見られた。一方で、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」と答えた学生も6名（35%）見られ、多様な学生が参加したといえる。

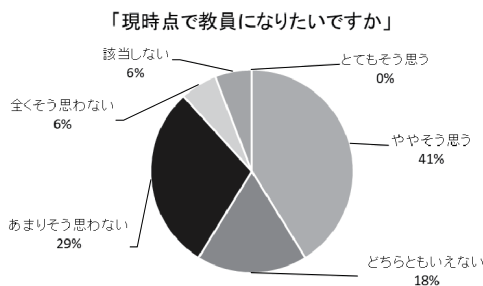


図1 参加登録者の教員志望度の内訳

## (2) 講演内容

開会、プログラムの企画意図の説明を行った後、外部講師の紹介を行い、講師による講演の時間がとられた。それぞれの講師の講演内容は以下の通りであった。

### ①民間企業の外部講師

本学教育学部（地域社会教育コース）を卒業と同時に大手損害保険会社に入社し10年以上継続勤務している方に講師を依頼し、現在従事している民間企業の仕事と教育学部の学びとの関連性を中心に講演された。また講師は採用担当も経験していることから、若手社会人として働くときに必要な考え方も触れられた。仕事を遂行するうえでは計画性や分かりやすく伝えるスキル、チームワークの重要性にも触れ、これらはすべて教育学部の学びの積み重ねで身につけることが可能であり、特に他学部にはない教育実習で得られることが社会人としての基礎になることなど教育学部の学びと実社会との接続について実体験を交えて具体的に説明された。

### ②公務員の方の講演

他大学の農学部を卒業後、2年間、海外青年協力隊の隊員として南大洋州ソロモン諸島にて理科教師として活動し、帰国後、栃木県中学校理科教師として勤務したのち、U市教育委員会指導主事としてU市が運営する野外教育施設に勤務する方に講師を依頼した。当日は、現在勤務する野外教育施設の勤務内容や魅力をはじめ、海外活動やそこに至った動機などを写真や動画を交えて説明された。学生へのメッセージとして、学生のうちに「可能性を広げる方向で動いてほしい」とことや「教える（教育する）」ということは、どんな仕事にも役立つことなど、現在の学生生活を前向きに捉えることの大切さを説明された。

### ③教員の方の講演

本学教育学部学校教育教員養成課程を卒業後に、栃木県内の公立中学校において数学科の教諭として10年以上勤務し、令和2年度より現職派遣院生として本学教職大学院に在籍されている方に講師を依頼した。当日は、社会の変化に伴い教育のアップデートが求められている中で、大学で教育の最新事情を知り、自分の興味・関心のあるものに積極的に取り組むことが重要であること、また、自分のよさに気づいたり、教育実習などの経験を生かしたり、人間関係の横と縦のつながりを意識したりすることなど

が教職に役立つことも説明された。さらに、教職の魅力や同僚性についても説明された上で、実際の活気ある学校現場の様子をまとめた動画を流していた。いつか一緒に働ける日を楽しみにしているというメッセージをもって結びとされた。

### (3) 学生との質疑応答

学生との質疑応答の場面では、まず、本学で事前に行っていた就職に関する学生の不安の自由記述をまとめた調査資料の結果から、多く挙げられた不安の一つである「自分が仕事に向いているか不安」という学生の声を紹介し、そのような不安をもつ学生に向けて、外部講師からのメッセージが伝えられた。そこでは、自分になりたい姿を考えることの重要性や、与えられた環境でいかに楽しく過ごすかの方が重要であるということ、また、教員に関しては、子どもが多種多様であるのだから教員も多種多様でよく、できないところは同僚に頼ってよいこと、自分が教員に向いているかどうかよりも自身の子どもへの想いを大切にすることの重要性などが共有された。

次に、学生からの質問を受け付けた。そこでは以下のような質問が学生から寄せられ、外部講師より回答を得た。

- ・就職活動で「なぜ教育学部なのに、この仕事を選んだか」聞かれた場合に、どのように答えたらよいと思うか
- ・他にどのような民間企業を受けたか
- ・非常勤と常勤教師の違い
- ・教員として、なぜ中学校を選んだか
- ・行動力の源泉は何か

上記のやりとりを通して、就職選択上、重視すべき点を知るとともに、就職の際、教育学部で学んだことを不利と捉えるのではなく、そこでの学びをどのように就職先に活かし、仕事をしたいかを考えることが重要であること、さらに、教育実習で実際の仕事を学生のうちから経験していることが、かえって強みになる可能性もあることなど、教育学部の学部としての学びや強みに目を向けることの重要性を学生に伝えることができた。

### 4. シンポジウムの効果検証

シンポジウムの効果を測定するため、シンポジウム前後に調査を行った。シンポジウム前はシンポジウム2週間前からシンポジウムまでに回答を求め、

17名より回答が得られた。シンポジウム後の調査では、シンポジウム直後～2週間後までの回答を求め、15名より回答が得られた。

回答は無記名であったが、学籍番号下2桁と誕生日の日付2桁を回答するよう求め、それらを組み合わせた数値にて参加者の対応付けを行った。対応付けができた参加者は11名であった。

#### (1) シンポジウムに対する参加者の感想

まず、シンポジウム後のアンケートで参加者の感想を「シンポジウムの内容に満足しましたか」、「シンポジウムの内容はご自身の将来設計に向けて役に立ちましたか」の2項目において「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で求めた。その結果、それぞれ図2、3の結果が得られ、「シンポジウムの内容に満足しましたか」の平均点は4.55 ( $SD = .93$ )、「シンポジウムの内容はご自身の将来設計に向けて役に立ちましたか」の平均点が4.46 ( $SD = .82$ )であった。

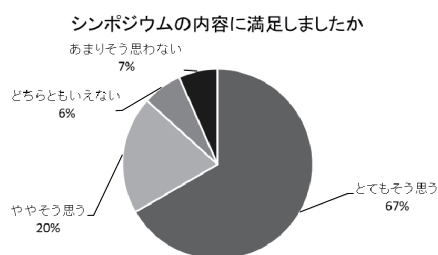


図2 参加者の事後アンケート

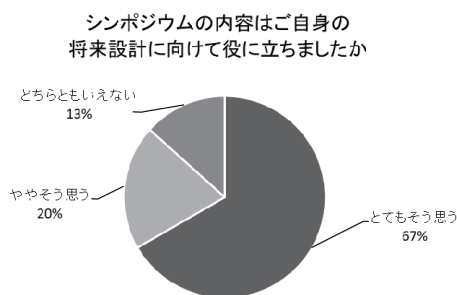


図3 参加者の事後アンケート

#### (2) シンポジウム前後の自己効力感の変化

シンポジウムの効果検証を行う上で注目したのは、自己効力感という概念の変化である。自己効力感とは、課題に必要な行動を成功裡に行う能力の自己評価のことで (Bandura, 1977) [3], 進路に関す

表1 キャリア選択自己効力感の平均値の変化および効果量 (N=11)

	シンポジウム前 (T1)		シンポジウム後 (T2)		T2-T1		差の95%信頼区間		効果量 <i>d</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値		下限	上限	
目標選択	2.11	0.48	2.67	0.47	0.56	3.76 **	0.23	0.90	1.21
情報収集	2.55	0.59	3.07	0.86	0.53	2.91 *	0.12	0.93	0.72
自己評価	2.69	0.71	2.91	0.68	0.22	2.13	-0.01	0.45	0.32
計画立案	2.09	0.58	2.73	0.50	0.64	3.94 **	0.28	1.00	1.18
意思決定の主体性度	3.04	0.50	3.02	0.68	-0.02	0.15	-0.30	0.26	0.03

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

る自己効力感としても概念化されてきた (Hackett & Betz, 1981) [4]。日本においては、自己効力感が進路決定において進路活動を計画立案し、行動を具現化しようとする意図 (探索意図) や職業に対する内発的な動機である自己向上志向と関連すること (安達, 2001) [5]、自己の理解・統合、振り返りを通して就職活動後の自己成長力の高さと関連すること (浦上, 1996) [6] 等が報告されている。

そこで本研究では、自己効力感を測定するためキャリア選択自己効力感尺度 (花井, 2008) [7] を使用した。この尺度は、自己評価・目標選択・計画立案・情報収集・意思決定の主体性度の5つの下位尺度からなり、志望する業種にかかわらない自己効力感が測定できる。そのため、教員を志望する学生は教員を想定して、教員を志望しない学生は、教員以外の自身のなりたい職業を想定して回答していた。各項目は「自信がある」「やや自信がある」「やや自信がない」「自信がない」の4件法で回答を求めた。

対応のある *t* 検定を行った結果、目標選択、情報収集、計画立案の平均値に有意な変化が見られた (表1)。効果量を算出したところ、特に目標選択と計画立案において .80 を超える強い効果が見られた。

## 5. まとめと今後の展望

今回、教員養成課程におけるキャリア教育の在り方を検討するために、教員以外の職業の講師をお招きし、「働くこと」や「生き方」についてお話を伺う機会を設けた。参加者の満足度は高く、人生の先達の経験談は、近い将来の自分の姿をイメージする上で参考になったようだ。また、大学では「教員」の話聞く機会は多く、学生も「慣れ」ている面があるが、それ以外の職種に就かれている方は、話の内容だけでなく、着眼点なども新鮮で印象深く、視野の広がりを感じられたのではないだろうか。それらが、目標選択と計画

立案の効果量の大きさに結び付いたと考えられる。

本シンポジウムは教員志向の強くない学生を主な対象として開催したが、教員になる上でも様々な職業や生き方を知り、感じることは大切である。将来的にこの試行を、学部全体への取り組みへと広げられるよう検討を進めたい。

## 6. 引用文献

- [1] 久保田愛子・石塚 諭・久保元芳・熊谷朋子・南 伸昌, 教員養成課程のキャリア教育の検討: 自己効力感の向上を目指して, 令和2年度日本教育大学協会全国教育実習研究部門第34回研究協議会 (オンライン) 研究発表 (2020).
- [2] 南 伸昌・久保元芳・熊谷朋子, 教育学部のキャリア教育についての実践報告, 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, Vol.7, pp.495-498 (2020).
- [3] Bandura, A., Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*, Vol.84, pp.191-215 (1977).
- [4] Hackett, G., & Betz, N. E., A self-efficacy approach to the career development of women, *Journal of Vocational Behavior*, Vol.18, pp.326-339 (1981).
- [5] 安達智子, 大学生の進路発達過程: 社会・認知的進路理論からの検討, *教育心理学研究*, Vol.49, pp.326-336 (2001).
- [6] 浦上昌則, 就職活動を通しての自己成長: 女子短大生の場合, *教育心理学研究*, Vol.44, pp.400-409 (1996).
- [7] 花井洋子, キャリア選択自己効力感尺度の構成 関西大学大学院人間科学, Vol.69, pp.41-60 (2008).

令和3年4月1日 受理



**Symposium on career education in teacher training  
course: Practice report for broad-minded teacher training**

**Aiko KUBOTA, Motoyoshi KUBO, Tomoko KUMAGAI, Satoshi ISHIZUKA  
and Nobumasa MINAMI**